

交流学習会での報告と記録 報告3

報告 東村山市立青葉小学校卒業生 須々田朋美

青葉小学校6年生の時、担任の佐久間先生が全生園を授業で取り上げてくださり、入所者の方々に様々なことを教えていただきました。これが、東村山市で初めて、子ども達が全生園とハンセン病についての真実を学ぶ第一歩となりました。あれから12年が経ち、24歳になった今、思い返してみれば、私の生き方、考え方の根源が、この全生園の学習にあるように思うのです。全生園についての教育を受けた生徒の一人として、当時から現在に至るまでの思いなどを報告したいと思います。

私は5歳の時に、全生園のある青葉町に引っ越してきました。

父も母も、もともとハンセン病について知識があるわけでもなく、また特に偏見もなく、「大きな公園があってよかったね」などと言ってよく家族で遊びに行っていました。資料館などから、ここがハンセン病の療養所であったことはなんとなく知りました。

小学校は、全生園を学区域に含む青葉小学校に通いました。放課後や休日は、全生園で絵を描いたり、木の実を拾ったり、野鳥や草花を探したりと、自然の好きな友達と一緒によく遊んでいました。4年生の時、その友達が、一緒に拾った木の実をお母さんに捨てられてしまい、もう全生園で遊んではだめだと言われた、と聞いた時、当時はよく意味がわかりませんでした。これは強く印象に残っている記憶のひとつです。今思えば、その友達は代々その土地に住み続けている家の子で、祖父母と共に暮らしていました。昔からの考え方を代々教えられて育つという、まさに無知なために起こる差別の伝達でした。

そして6年生になり、初めて全生園のことをきちんと学びました。入所者の方を学校にお招きしたり、また全生園に出かけていってお話を伺ったりしました。私達を孫のようだとかわいがってくださり、差別・隔離の歴史や、つらく苦しい経験、希望をもって生きてきたこと、戦ってきたこと、命の尊さなど、一生懸命に話してくださる「おじさん」を私達は好きになりました。おじさんの熱意を受けて真剣に学ぶ子ども達の姿は、周りの大人達の意識をも少しずつ変えていったことでしょう。

それから数年が経ち、大学で教育学を専攻し、障害者や同和問題といった人権問題を中心に学びました。そして4年間の、それまでの人生の集大成ともいえる卒業論文の題材に選んだのが青葉小学校のハンセン病学習についてでした。大好きな全生園についてや、おじさんたちの想いを伝えるのは、私の使命であると思い、精一杯書きました。

大学を卒業し、今は知的障害者の授産施設で働いています。みんなが笑顔で幸せに暮らせる社会を守るために、ほんの少しでも役に立ちたいという想いでいます。そしてつらい経験をしてきたにもかかわらず、否、だからこそかもしれないが、恨みを恨みで返すことなく、穏やかな笑顔とまっすぐな信念で生きるおじさんの姿は、今の私の目標でもあります。

当時授業を受けたすべての生徒が同じ気持ちだとは言いきれませんが、少なくとも私は、自分の生き方や考え方の基礎をつくってくださった全生園と、先生方と、入所者の方々に心から感謝しています。同時に、いつまでもどこまでも学び伝えていくことが、彼らの想いを受け継いだ者の使命であると感じています。